

## ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察

和田 光弘

### はじめに

初代大統領ジョージ・ワシントンが、大統領職第二期八年目も終りに近づく一七九六年九月、自らの三選不出馬と、当時の内外政について、思うところを開陳した文章、それがいわゆる「告別演説」(“Farewell Address”)である(以下、括弧を外し、告別演説とする)。そもそもワシントンの大統領就任を前提に、合衆国憲法第二条(大統領に関する規定)が定められたとも言われ、ヨーロッパ諸王国の世襲王制に対して一種の「選挙王制」として位置づけられた大統領職を、ワシントンが終身で務めてくれると考えていた者も当時、非常に多かった。すなわち、ワシントンが四年ごとに大統領に選ばれ続け、在職のまま、鬼籍に入るというイメージである。しかし、アレクサンダー・ハミルトンを軸とする政界の路線対立から、いわゆる第一次政党制が展開してゆく中で、独立戦争中に生死を共にした右腕たるハミルトンを深く信頼していたワシントンは、とりわけ第二期目において、自らの政治的立場として連邦派(フェデラリスト党)寄りのスタンスを取ら

ざるをえなくなった。これに対して共和派(リパブリカン党)からの批判も強く、生きながらに神格化の途上にあったワシントンといえども、合衆国憲法が予期しなかったこの党派対立を克服するすべは見出せなかった。彼が告別演説で党派対立の回避を呼び掛けた所以である。かかる政局下で、そもそも大統領就任に当初、必ずしも乗り気でなかった(ように見えた)ワシントンが<sup>①</sup>、自身のプランテーション、マウントヴァーノンに引退したいと考えたとしても不思議ではない。かくしてワシントン以降、歴代の大統領たちは皆、ただ一人の例外(F・D・ローズヴェルト)を除いて、最大二期八年までしか同職に留まらないとする前例を踏襲した(むろんトルーマン以降は、この原則が憲法修正第二二条に明記された)。さらに告別演説は、当時のヨーロッパの騒乱から距離を置くように説いて、いわゆる「孤立主義」外交の源流となったとされており、その意味でも、きわめて重要な文書と位置づけられる。

では、この告別演説は、どのような形で国民に伝えられたのか。じつのところ、「演説」の訳語は誤解を生みやすい。この文

書が口頭で発表された事実はなく、実際にはフィラデルフィアの新聞紙上に掲載されたのみだからである。したがって、「告別演説」よりも「告別の辞」の方がよりふさわしい訳と言えるが、本稿ではあえて従来からの伝統的訳語ともいえるべき「演説」のままとした。そして本稿で問題とするのは、この「演説」の内容、すなわちテキストの主要部分ではない。この文書のテキストの生成に関しては、ハミルトンの関与などを含め、詳細に説明されており、また、このテキストの後世への影響についても、その研究は汗牛充棟の観がある。本稿で考究するのは、このテキストの末尾の部分のみ、つまり、「日付」である。日付はテキストの一部であるが、史料そのもの、もしくは史料の形態(テキストチャー)と不可分の関係にあり、興味深い知見を与えてくれるのである。

## 第一節 二つの日付の謎——問題の所在

ワシントンに関して歴史的に有名な本と言えば、桜の木のエピソード(の捏造)で知られるM・L・ウィームズ『ワシントン伝』である<sup>2)</sup>。同書はワシントンの死去の翌年、一八〇〇年に上梓されてから、ウィームズ自身が亡くなる一八二五年まで二九版もが刷られているが、筆者の所蔵する第一二版(一八一二年)では、告別演説の日付はどのように記されているのだろうか。同書

の第一章の文中には、告別演説の全文がそのまま収録されており、末尾にはむろん日付も確認できる。該当する箇所のみを切り出したのが図1であり、「G・ワシントン、合衆国」の表記とともに、「一七九六年九月一七日」と明記されている。また、版を遡って一八〇九年の第九版を調べても、確かに同様の表記・日付となっている<sup>4)</sup>。ちなみにウィームズは、ワシントンが実際に演説をおこなったとは書いておらず、むしろ文章が新聞に掲載された事実に触れているのだが、告別演説を「説教(“sermon”)」に比しながら説明しており、このことが、この文章が口頭で述べられた——述べられた後に新聞に掲載された——との誤解を後世に生じさせたと考えることもできる。ともあれウィームズによれば、この文章の日付は「一七日」である。

彼はこの文章が掲載された新聞の名称や発行日については明記していないが、当然、それらについてはよく知られている。掲載紙は当時のフィラデルフィアを代表する新聞ともいえる『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』(五四四四号)で、日付(発行日)は九月一九日(月曜日)である。図2に当日の新聞の題字を掲げた。そしてこの新聞の二頁から三頁にかけて告別演説の全文が掲載され、最後に「G・ワシントン、合衆国」の表記と「一七九六年九月一七日」の日付が置かれている(図3)。つまり、この文章が最初に印刷、公開された新聞の日付は一九日であるが、文章の日付自体は一七日とされているのであり、このよう

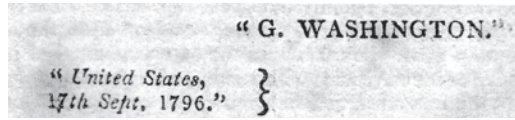


図1 M・ウィームズ『ワシントン伝』（第12版、1812年）に収録された「告別演説」の末尾部分。(Mason Locke Weems (alias Parson Weems), *The Life of George Washington, with Curious Anecdotes, Equally Honourable to Himself and Exemplary to His Young Countrymen*, 11th ed., Philadelphia, 1812, p. 161.) (筆者所蔵)

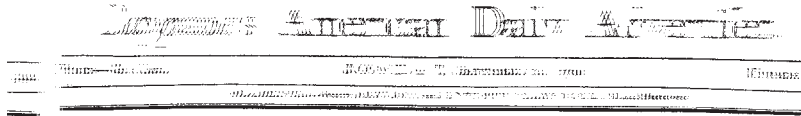


図2 『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』5444号（1796年9月19日発行）の題字部分。(Claypoole's *American Daily Advertiser*, No. 5444, Philadelphia, Sep. 19, 1796.)

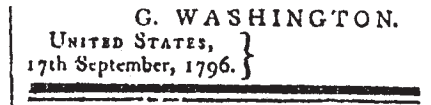


図3 『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』紙掲載の「告別演説」の末尾部分。(Ibid., p. 3.)

に二種類の日付が存在することから、告別演説の日付を一七日とする立場のみならず、一九日と表記する立場も有りうることになる。主要なアメリカ史の概説書では、いったいどちらの表記が多く採用されているのだろうか。アメリカと日本で、主に二〇世紀後半に出版された——もしくは広く知られ、用いられた——書物をいくつか紐解くならば(表1)、一七日が圧倒的ではあるものの、それとともに一九日の日付を挙げているものもある(一点だけ、一九日のみがある<sup>⑤</sup>)。先述したように、多用される「一七日」にはウィームズの影響(の系譜)を見て取ることもできようし、一方、掲載新聞の存在は当時から知られていたと推測されるため、告別演説についてある程度詳細に説明する際には、「演説」文中の日付(一七日)とともに新聞発行の日付(一九日)を併記することも、理にかなった処置といえる(一点のみ、一七日を新聞発行日と錯誤しているものがある)。そして、これが「演説」の日付に関する問題のすべてだとしたら、あえて再訪する必要もなからう。だが、事はそう単純ではない。

当然ながら、新聞掲載の「演説」には、新聞社が活字を組む際に用いた原稿が存在する。その原稿とは、ワシントン自らの手になる直筆の手稿であり、現存し、ニューヨーク公立図書館に収められている。したがって、告別演説について今日のアメリカ史概説書から遡って訪ねるならば、ウィームズの著書を経て、当日の新聞、そしてその新聞掲載の文章、さらにワシントンの手稿へと

表1 20世紀後半の概説書等におけるワシントン「告別演説」の日付

番号	書名	著者・出版社	刊行年	日付		備考
				9/17	9/19	
1	<i>The Life of Washington</i>	Weems	1809	x		原文中
2	<i>Documents of American History</i>	Commager	1949	x		本文中
3	<i>The American Republic</i>	Hofstadter, et al.	1959	x 新聞		本文中
4	アメリカの歴史	モリソン	1965	x		本文中
5	<i>America</i> (2nd ed.)	Tindall & Shi	1988	x 原文	x 新聞	本文中
6	<i>America</i> (5th ed.)	Tindall & Shi	1999	x		本文中
7	<i>The Presidents</i>	Graff	1997	x		年表中
8	<i>Presidential Fact Book</i>	Kane	1998	x		年表中
9	<i>The Boisterous Sea of Liberty</i>	Davis & Mintz	1998	x		原文中
10	世界各国史 (8) アメリカ史・新版	山川出版社	1969	x 年表	x 本文	
11	世界の歴史 (17)	河出書房新社	1969	x		本文中
12	アメリカの文化 (別巻1)	南雲堂	1971	x 原文	x 新聞	
13	世界の歴史 (17)	講談社	1978	x		
14	ビジュアル版・世界の歴史 (15)	講談社	1984	x		年表中
15	人物アメリカ史 (1)	集英社	1984	x		本文中
16	アメリカハンドブック	三省堂	1986		x	年表中
17	史料が語るアメリカ	有斐閣	1989	x 原文		
18	世界歴史体系・アメリカ史 (1)	山川出版社	1994	x		年表中
19	世界各国史 (24) アメリカ史	山川出版社	1999	x		年表中

註：リストは月日の日付が記されているもののみ。また、「原文中」とは、告別演説そのものに付された日付の意。多くは原文（訳を含む）を引用している。

[アメリカ等で出版された著書（その翻訳を含む）の略語対応一覧]

2: Henry S. Commager, ed., *Documents of American History*, 5th ed. (N.Y., 1949), 169-175; 3: Richard Hofstadter, William Miller & Daniel Aaron, *The American Republic*, Vol. 1 (to 1865) (Englewood Cliffs, N.J., 1959), 280; 4: サムエル・モリソン (西川正身監訳) 『アメリカの歴史 (集英社文庫版)』第2巻 (集英社, 1997年), 270頁 (Samuel E. Morrison, *The Oxford History of the American People* (Oxford, 1965); 5: George B. Tindall & David E. Shi, *America: A Narrative History*, 2nd ed., Vol. 1 (N.Y., 1988), 324; 6: *Ibid.*, 5th ed. (N.Y., 1999), 358; 7: Henry F. Graff, ed., *The Presidents: A Reference History*, 2nd ed. (N.Y., 1997), 671; 8: Joseph N. Kane, *Presidential Fact Book: The Facts on All the Presidents from George Washington to Bill Clinton* (N.Y., 1998); 9: David B. Davis & Steven Mintz, eds., *The Boisterous Sea of Liberty: A Documentary History of America from Discovery through the Civil War* (Oxford, 1998), 272.

## 第二節 七か九か

そもそも、ワシントンの告別演説に関して、今日知られている

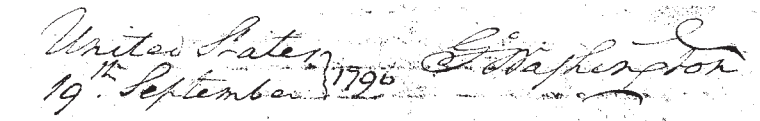


図4 「告別演説」手稿の末尾部分。(Victor H. Paltsits, *Washington's Farewell Address: In Facsimile, with Transliterations of All the Drafts of Washington, Madison, & Hamilton, Together with Their Correspondence and Other Supporting Document*, (New York), 1935, p. 136.)

至ることになる。そして、驚くべきことに、この手稿に記された日付は、「九月一九日」なのである(図4)。

整理してみよう。(a)当日の新聞の日付(発行日)は一九日である。

(b)その中に掲載された「演説」の日付は一七日である。(c)その「演説」の文章を活字に組む際に用いた原稿(ワシントンの手稿)の日付は一九日である。それでは、現在最も「普及」している一七日説の根拠は、どこに求められるのだろうか。(a)と(c)の「一九日」の間で、(b)の「一七日」はいかに生成されたのだろうか。本稿は、「一九日」の狭間で臆に揺れる「一七日」の謎を追った一つの試論である。

(直接の)草稿は五種類ないし六種類存在する。<sup>(6)</sup>①一七九二年のマディソンの草稿、②一七九六年のワシントンの草稿(「ワシントンの第一草稿」)、③ハミルトンによる演説作成の要点摘要、④ハミルトンによる主要草稿(「ハミルトンの主要草稿」)、⑤ハミルトンによる統合草稿、⑥最終草稿(「ワシントンの最終草稿」)である。これらの番号は、基本的に時系列に沿って付されたもので、草稿が完成へと向かってゆくさまを示しているといえる。そしてワシントンは⑥の最終草稿を内閣の面々に見せている。先に述べたワシントン直筆の原稿とは、むしろこの最終稿の⑥にあたる。そしてこの⑥以外については、少なくとも演説自体の日付は記されていない。つまり、上記のような経緯を経て生成された原稿の日付を確定するには、⑥を待たなければならなかったともいえる。<sup>(7)</sup>

さてそれではこの⑥、つまりワシントンが最終的に新聞社に渡した「ワシントンの最終草稿」に焦点を絞ってみよう。そもそも手稿史料の文字は、一般的に言って読みにくい場合がある。では、このワシントンの手稿に記された日付の数字が、九ではなく七である可能性はないのだろうか。また、その数字が、ワシントン自身の手によって記入されたものでない可能性はないのだろうか。なんとすれば、これらの前提が崩れるならば、本稿の問題設定自体が無意味になるからであり、最初に確認すべき最重要事項といえよう。

図5 ワシントンの日記(1790年3月19日)に見える自筆の「7」と「9」。(William M. S. Rasmussen & Robert S. Tilton, *George Washington: The Man behind the Myths* (Charlottesville, 1999), p. 219.)

まず、後者の問いから見てみよう。ワシントンの字体にはかなりの特徴、癖があり、見慣れると、その識別は比較的容易である。むしろ、それは当時の真正文書を見る限り比較的容易という意味であって、必ずしもワシントンの偽文書の鑑定が容易であると主張しているわけではない。ただ、ニューヨーク公立図書館に収められている本手稿に関しては、偽文書の可能性を想定する必要はない。後述する複数の史料

(報告書や書簡)の証言から明らかのように、本手稿の来歴については一点の曇りもないからである。そしてこの手稿が全文にわたって——すなわち、日付も含めて——ワシントン本人の手になるものであることも、これらの史料によって証明されていると考えてよい(ただしある報告書において、日付に関してだけは当初、断定することに若干の躊躇が見られ、その微妙なニュアンスにこそ、本稿で扱う問題の本質が投影されているともいえるが、これについては後述したい)。ともあれここでは、日付のくだりについて間違いなくワシントンの真筆であることを、彼が残した他の史料と比較しながら確認しておきたい。図5をご覧いただきたい。これはワシントンの日記の一部であり、「一七九〇年三

月」と年月のみが書き込まれているが、正確には一七九〇年三月一九日金曜日に記入されたと考えられる箇所である。字体は年齢とともに若干変化するため、告別演説と近い年代の箇所を比較対象に選定している。図4の告別演説の手稿と比べるとどうだろうか。両者ともに、ワシントンにきわめて特徴的なアルファベット形状が認められるが、ここで注目したいのは数字、すなわち七と九である。両者の七と九はほぼ一致しており、とりわけ特異な形状を持つ九については同じ字体と断言しうる。ちなみに、図4の「一七九六」の上のあたりにうっすらと見える線は、裏に書かれた文字列が透けて見えているもので、決して削除等の印などではなく、まったく本推論に影響する要素ではない。一方、その図4の中の七と九(「一七九六」の七と九、および「一九」の九)を見ても、字体の一致する二つの九は、七とは明らかに異なっており、それは図5においても同様である。つまり、字体の対応する双方の図において、七と九は異なっているのだから、ここにおいて最初の問いもおのずと解決したといえる。つまり、告別演説のワシントンの手稿は、ワシントンの真筆であり、確かに一九日と記されているのである。

じつは先に「一七日説」が最も一般的と述べたが、それはあくまでも二〇世紀後半の概説書に關しての事実であって、近年のアメリカにおいてワシントンの告別演説に特化した記述、たとえば告別演説を扱ったサイト<sup>8)</sup>、告別演説の専門書<sup>9)</sup>、さらにはワシント

ンの専門家が当該項目を執筆した事典（ブリタニカなど）<sup>(10)</sup>などでは、九月一九日の日付が採用されている。つまり、一般的なアメリカ史概説書とは異なり、告別演説に関する詳細な記述が含まれる書物やサイト等では、近年はむしろ「一九日説」が多いと考えられる。しかもそれらの「一九日」の典拠は、新聞の発行日（先述の（a））というよりも、オリジナルの手稿の日付（先述の（c））にあるように思われるのである。ウエブ等を通じて、オリジナル手稿の画像へのアクセスが容易になったことも、その一因であろうか。つまり、ワシントンの手になるオリジナル手稿に準拠するならば、そもそも「一七日」は存在意義を失う。この日付は、いわば俗説の一つとして、歴史の闇の中に消えてしまいかねないのである。

では、これまで研究史の上で、これらの問題が議論されることはなかったのか。そもそも告別演説についての研究は、近年では告別演説二〇〇周年（一九九六年）を契機として高まりをみせ、なかでも Patrick J. Garrity, *A Sacred Union of Citizens: George Washington's Farewell Address and the American Character* (Lanham, Md., 1996) は、最新の優れた論考といえよう。しかし同書も、主として演説のテキストの内容を組上に載せて論じているのであって、その生成に関しても、かかる視点から考察が加えられていると言ってよく、われわれが関心を抱く手稿の日付については、特に言及はなされていない。じつのところ、古典的な史

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

料批判ともいえるこの日付の問題について、重要な示唆を与えてくれるのは、一九三五年に V・H・パルツィツが上梓した五〇〇部限定出版の大著 (Victor H. Paltsits, *Washington's Farewell Address: In Facsimile, with Transliterations of all the Drafts of Washington, Madison, & Hamilton, Together with their Correspondence and Other Supporting Document*, [New York], 1935) である（筆者が実見した同書は四一三番のナンバリングが付されている）。同書は、それ以前の文献学的な考察、とりわけ J・レノックスが、入手した告別演説手稿をもとに一八五〇年に刊行した J・レノックス編『ワシントン告別演説』（後述）などを詳細に検討し、関連史料を渉猟して同書を編んだ。上梓から八〇年ほど経った古い書物だが、告別演説の文献学的な考察において同書を凌駕するものは存在しないと行ってよからう。本稿においても同書は導きの糸であり、日付に関する同書の示唆——必ずしも断定的ではないが——は、説得的だと判断しうる。また、さらに古い、筆者が偶然手にした小冊子で、今日ではほとんど忘れ去られた Charles Robert Gaston, ed., *Washington's Farewell Address, Webster's First Banker Hill Oration, Lincoln's Gettysburg* (Boston, 1906, 1919) にも日付に関して示唆に富む指摘があり、参考にした<sup>(11)</sup>。これらの研究に導かれ、また、関連する史料を詳細に検討するならば、この手稿とその印刷をめぐる、さらにいえば大統領官邸のワシントンと『アメリカン・デイ

リー・アドヴァタイザー』紙を発行する新聞社主のデイヴィッド・C・クレイプールのめぐって、一連の状況が浮かび上がってくる。われわれが追い、再現を試みるのは、一七九六年九月十五日木曜日から二〇日火曜日までの六日間、場所はむろんフィラデルフィアである。

### 第三節 六日間の再現(一) —— 関連史料の提示

この六日間を再現するに際して、最も直接的な痕跡を残しているのは史料、すなわちクレイプールの印刷の際に用いた告別演説の校正ゲラ(校正刷り)は見つかっておらず、おそらく失われてしまったと考えられる。また、公刊されているワシントンの日記に、これらの日々に関する記載はない。<sup>13</sup>したがって、校正ゲラや日記以外の、いわば状況証拠に頼らざるをえない。以下に掲げる五点の史料は、【史料1】を除いて、いずれも後世になされた関係者の証言等であるが、当時の状況を最も直截に説明していると考えられるものである。注釈等を加えながら、時系列に沿って順に見てゆきたい。

【史料1】 ワシントン宛てのティモシー・ピカリングの書簡<sup>14</sup>  
 ニューヨーク公立図書館所蔵。(一七九六年九月一日、フィラデルフィア)

拝啓

本日、手ずから私にお渡し下さいました書類【註 ワシントンの最終草稿の意】につきまして、皆で注意深く、丁寧に拝読させていただきました。今現在も私自身、念入りに目を通させていたいておりますが、就寝される頃までに読み通してご返却申し上げるのは無理ではないかと存じます。明日の朝、ご朝食の前に、書類を持って参上させていただきます所存です。

敬具

木曜夕刻

T・ピカリング

合衆国大統領閣下

【史料2】 ペンシルヴァニア歴史協会に提出された、デイヴィッド・C・クレイプールの対談に関するウィリアム・ロールの報告書(以下「ロール報告書」<sup>15</sup>)。ロールはペンシルヴァニア歴史協会会長。この自筆の史料は現在、ニューヨーク公立図書館に収められている。また、一八五〇年に刊行されたJ・レノックス編『ワシントン告別演説』(Washington's Farewell Address)にも、Appendix Bとして収録されている(同書は、ニューヨーク公立図書館の貴重図書室に厳重に保管されており、特別に許可を得て、同書を実見した)。傍線およびブラケット(「」)は筆者による。



一八二五年二月一六日

デイヴィッド・C・クレイプール氏との対談

ワシントン大統領の告別演説の手稿をクレイプール氏が所有しているとの知らせを受け、私は氏に手紙を書いて、その手稿を当協会に預けてくれないかと頼んでみた。氏は二月五日付の返信で丁重に断ってきた。そこで私は再度手紙をしたためて、氏が告別演説を印刷するに際して大統領と交した会話について、氏の口から直接に聞かせてほしい旨、お願いした。今日、氏は私を訪ねて来て、次のような話を聞かせてくれた。大統領が私設秘書を通じて氏に会いたいとの旨を伝えられ、氏が指定された時間に訪問すると、大統領は一人きりで部屋におられた。

大統領は氏が発行している日刊紙に、合衆国人民に宛てた自らの演説を掲載してほしいと言われた。クレイプール氏はこれまでの自身の編集方針が高く評価されたものと思ひ、かかる目的のために自分を選んで下さって非常に光榮ですと答えた。大統領は会釈をして賛同の意を示し、いつ印刷できるかとさらに尋ねられた。クレイプール氏はいつでもお望みの日時にできますと返答した。大統領は可能な限り早くと要望され、校正のゲラを自分の元に届けてほしいと言われた。

翌朝、先に大統領のメッセージを伝えたのと同じ人物によって手稿【註】MS.と表記。クレイプールは陳述書【史料4】で“copy”と表現しているが、これがMS.の「写し」ではなく、

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

オリジナルの手稿の意であることが、両者を突き合わせることではっきりとわかる【】が届けられ、ただちに組版の作業が開始された。初校と再校「複数」が大統領の元に届けられ、最初の会見からおよそ四日後の一七九六年九月一九日、紙上にて演説が発表された。

その後、クレイプール氏は手稿を返却するため、現物を携えて大統領を訪ねたが、その際、万が一この手稿を今後も自分の手元に置くことができるならば無上の幸せですと、非常に丁寧な態度で頼み込んだところ、大統領はそれで氏が満足するならばどうぞと言われた。こうしてクレイプール氏はこの貴重な自筆原稿を手にしたまま大統領府を後にし、以後、決してこれを手放そうとしないのである。

クレイプール氏はこれらの事実を話したのち、私にオリジナルの手稿を見せてくれた。すべてがああ偉人の手になる三〇ページほどの四つ折版の小冊子を、私は畏敬の念と喜びの感情を抱きつつ手に取った。それは至るところ、オリジナルの痕跡で満ち溢れていた。数多くの削除箇所や行間への挿入文、パラグラフの入れ替えなど、一人の人物が誰の手も借りずに書き記したことが一目瞭然であった。

全部の行数を数えてみたところ、一〇八六行あり、削除された部分は一七四行であった。

私はワシントン大統領の筆跡については完璧なまでに心得てい

るので、このテキストの一語一語すべてが、挿入文に至るまで、彼の、そして彼一人の手になるものであることがわかって大いに満足したのである。ただ一箇所、一七九六年九月一九日の日付には疑念を抱いた。私はアレグザンダー・ハミルトンの筆跡にも通じているので、この日付が彼の手になるものでないことだけは断言できる。大統領の私設秘書が記したのかもしれない。もつともクレイプー氏は、これについても大統領自身の手になるものだ<sup>17</sup>と固く信じている。

W・ロール

【史料3】クレイプー宛てのロールの書簡(宛先の住所はペンシルヴァニア州プリストル、消印は二月一日)<sup>18</sup>。ニューヨーク公立図書館所蔵。

D・C・クレイプー様

拝啓

過日わざわざお運びいただきました際に、ご親切にもお話し下さいました内容の件ですが、これを公にするにあたっては、真つ先に貴殿にお目通し願うことなく公表はしないと申し上げました。当歴史協会では、やはりこれを活字にしたいとの意向がかなり強いように思われます。そこで、この件につきましてご了解いただけますかどうか、お知らせ願えれば幸いです。

一八二六年一月三一日

W・ロール

敬具

【史料4】ペンシルヴァニア歴史協会に宛てた、デイヴィッド・C・クレイプーの陳述書(以下「陳述書」)(一八二六年二月二二日)<sup>19</sup>。Memoirs of Historical Society of Pennsylvania, vol. 1 (1886)に掲載されたもの。ただしこの陳述書の草稿は、先述のニューヨーク公立図書館・貴重図書室の保管になるレノックス編『ワシントン告別演説』の Appendix A に収録されている。クレイプーはこの草稿にかなり加筆修正して最終的な陳述書を作成したため、両者には微妙な違いが数多く認められ、とりわけ告別演説の校正に関する箇所の相違は重要である。拙訳においては、①陳述書にあつて草稿にない文言は山括弧、②草稿にあつて陳述書にない文言はブラケットに入れ、③さらにブラケット内の文言が、陳述書の特定の文言に差し替えられている場合は、その特定の文言に傍線を施した(ただし同義語の入れ替えについては捨象した)。パルツイッツも類似の校異作業を、より簡潔な形でおこなっているが、あまり細部の差異に重要性を認めなかったためか、遺漏があり、完全とは言いがたい。なお、レノックス編に収録されている草稿は、クレイプーが自ら保管していたもので、レノックスが告別演説の草稿を入手した際、同時に落手したもの

である。この草稿も現在、ニューヨーク公立図書館が所蔵しており、偽文書でないことを証明する宣誓供述書（一八五〇年二月一日付）が添付されている。

故ワシントン大統領が合衆国人民に宛てて出された告別演説を最初に印刷した際の諸事情について、〈ペンシルヴァニア歴史協会〉「数人の非常に尊敬すべきジェントルマン」より説明を求められたので、覚えている限り正確に記したい。

この〈記念すべき〉「非常に興味深い」文書が印刷に付される数日前、大統領が私に会いたがっているという知らせを大統領の私設秘書「リア大佐」より受けた。約束の時間に参上すると、謁見の間で大統領は一人、座っておられた。私が丁寧に挨拶すると、大統領は「非常に」親切に接して下さり、側に座るようおっしゃられた。そして次のように述べられたのである。しばらく前から政界を退こうと思っていたが、任期の終わりに際して、ついに決断した。ついては折に触れて考えていたことを、合衆国人民に〈演説の形で〉伝えたいと思い、クレイプーブル氏が「社主および」編集者を務める『デイリー・アドヴァタイザー』紙に掲載してくれないか、と。大統領はここでいったん話を切られたので、私は大統領が〈人民との〉「大衆との」コミュニケーションの場として弊紙を選んで下さったことに対して感謝の念を伝えた。私の仕事のやり方や原則を、大統領が評価して下さったゆえの選択

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

だと考えたからである。大統領は無言で賛意を表された後、「私に」いつごろ印刷できるかと尋ねられた。私は大統領のご都合に合わせていただきますと答え、次の月曜日に決まった。そこで大統領は私に、翌朝（金曜日）、秘書に原稿を届けさせるとおっしゃり、私は退席した。【註 草稿では次の改行なし】

校正刷りを「注意深く」原稿と見比べて、私自身が修正を施した後【註 内校の意】、大統領に校正して頂くべく、〈別の校正刷り、次いで再校刷り〉を「二つの異なる再校刷り」を持って行った。【註 最初のゲラが初校刷り、次が再校刷りとなる。草稿では初校刷りと再校刷りを合わせて、二つの異なる再校刷りと表現していたが、より正確を期すため、陳述書では時間の経過を加味した表現を選択したと考えられる】大統領はオリジナルの文章にほとんど手を加えられなかったが、句読点については、細心の注意を払って修正を施された。【註 草稿では次の改行なし】

〈合衆国、一七九六年九月一七日〉と日付が付された。「一七九六年九月一九日という、新聞と同じ日付が付された」演説の掲載が（一九日に）完了したので【註 陳述書の草稿は告別演説に付された日付に関して間違っており、陳述書で正確な表現に直したものである。この間違いは、単純に新聞の日付に引きずられたものとも考えられるが、後述するように、自身が修正する前の、すなわちワシントンの草稿に明記されたオリジナルの「一九日」という日付によって惹起されたとも想像しうる。またこの箇

所は、日付を余り意識していなかった証左とも、一方、それを正確に直したという意味では意識していた証左とも受け取れる」、

私はオリジナルの原稿を片手に大統領を訪ね【註 ワシントンは一九日早朝、マウントヴァーノンへ発っているのです、しばらく後のことであろう】、それを大統領に差し出しつつ、(この原稿を手放すのがいかに残念か、また)もし手元に置くことができなければ嬉しうか申し上げたところ、大統領は「非常に」丁寧な物腰でそれを手ずから戻して下さり、もしこの原稿をご所望ならば、どうぞ取っておいて下さいとおっしゃった。「そして」私は退席したのである。

【註 以下、手稿の文書としての特徴が述べられており、十数行省略】「それを」詳しく調べるならば、最初から最後まで、「多くの」修正部分も含めて(同じ)「ただ一人の」手によるものと分かるであろう。私は確信を持って、今所有しているこの(手稿)「オリジナル」には、(そこに署名されている)「国民に最も慕われている」あの偉大な「良き」人のほか、何人の手も加えられていないと断言できる。

一八二六年二月二二日、フィラデルフィアにて。

D・C・クレイプール

【史料5】クレイプールの陳述書に付されたロールの文章  
(*Memoirs of Historical Society of Pennsylvania, vol. 1*)。【史料2】

を書いた際におこなった調査の結果を、再度記したものであろう。

前述のクレイプールの証言に対して(彼が公正、高潔な人物であることは、すでに周知のところではあるが)、以下の事実を付け加えても蛇足にはなるまい。すなわち、かの偉人の筆跡に精通している私が、当該の手稿を最初から最後まで注意深く調べたところ、そこには大統領以外の手になる文言は一語たりとも見出せず、かかる結果に大いに満足したのである。ただ一箇所、日付については疑念を抱いた。一見したところ、日付の文字が他と完全には同じでないように思われたのである。しかしさらに詳しく調べた結果、同一の手になる文字であると考えるに至った。この点については、クレイプールの氏も完全に同意見である。ともあれ、私はハミルトン將軍の筆跡についてもよく心得ているので、手稿に彼の手が加わっていないことに大いに満足した。ただ日付については、大統領の私設秘書が書き入れた可能性もある。

一八二六年二月二二日

W・ロール

#### 第四節 六日間の再現(二) —— 何が起きたのか

さて、以上の史料を手がかりとして、告別演説をめぐってこの六日間に何が起きたのか、日を追って可能な限り再現してみよ

表2 『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』 関連号

発行日			号数	総頁数	備考
年	月日	曜日			
1796年	9月15日	木	5441号	4頁	
〃	9月16日	金	5442号	4頁・後記1頁	
〃	9月17日	土	5443号	4頁・補遺2頁・後記1頁	
〃	9月18日	日	休刊	—	
〃	9月19日	月	5444号	4頁	告別演説：2～3頁
〃	9月20日	火	5445号	4頁	ワシントン消息：3頁

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

う。主たる史料は、クレイプールの詳細な証言である【史料4】となる。そもそもクレイプールのワシントンとの関係は、「文書が印刷に付される数日前」、秘書のトバイアス・リアがクレイプールのワシントンが会いたがっているとのメッセージを伝え、時間を指定したところから始まる。約束の日時ではなく、「約束の間」とされているため、このメッセージが伝えられたのが会見の当日、つまり九月五日の可能性もある。なんとすれば、大統領府とクレイプールの新聞社とは位置的に近く、迅速な行き来も可能であり、のちの校正のやり取りも、この距離的な近さゆえに、時間的に余裕を持ってお

こなえたと考えられるからである。実際、大統領府と新聞社は、共に当時の目抜き通り（高台にある「ハイ・ストリート」。市場ができたため、一八世紀初めころから「マーケット・ストリート」と呼ばれるようになった）に面し、およそ四ブロックを隔てているだけであった<sup>19</sup>。この通りを、リアが、そしてクレイプールの歩く姿が目につかぶ。原稿やゲラを抱えて彼らが往来したこの六日間について、一日ずつ見てゆくことにしよう。なお、その間に発行された『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』紙について、簡潔にまとめておきたい（表2）。同紙は日刊紙であり、毎号およそ四ページからなっている。告別演説が掲載されたのは月曜日であるが、ストーリーはその前の週の木曜日から始まる。

#### 九月一五日木曜日

この日にクレイプールの大統領府へ赴く。この会見のときに、原稿はワシントンの手元にはなかったはずである【史料1】にあるように、テイモシー・ピカリングが持っていたと思われる。もしあればその場で渡したであろうし、実際、クレイプールの時に原稿を目にしたとは言っていない。さらにピカリングが持っていたと思われる原稿には、日付が入っていなかった可能性が高い。クレイプールの話をしてみなければ、いつ印行が可能かわからないからであり、この印行日の決定こそ、この会見の

主要目的であつたはずだからである(ガストンは、この日付はワシントンによつてあらかじめ設定されていたと理解しているが、必ずしも詳しい説明はなく、説得的ではない)。そしてこの時、新聞紙上での発表は月曜日(一九日)と決まった。

九月一六日金曜日

この日の早朝、ピカリングが原稿をワシントンに返却。この時に、ワシントンが自ら日付を書き込んだ可能性が高い。パルツィツも日付が決まってから、ワシントンが書き加えたとしている。<sup>20)</sup>【史料2】の傍線部や、【史料5】にあるように、ロールもこの日付について「疑念を抱い」ている。原稿の日付が、新聞のテキストに記された一七日ではなく、新聞発行日の一九日となっていたため、困惑を禁じえなかつたのであろう。【史料5】でロールは、「一見したところ、日付の文字が他と完全には同じでないように思われたのである」と記しているが、その疑問も、上記の日付の違いから喚起されたものと推測される。ロールは、原稿の日付がハミルトンの記したものでないことは明言しているが、秘書の手になる可能性を排除していない。ただ、この仮説についてはむしろ確信を持っていないし、クレイプールはワシントンの自筆だと「固く信じている」と記している(【史料2】)。「史料2」の日付のおよそ三か月後に印行された【史料5】では、ロール自身、「さらに詳しく調べた結果、同一の手になる文字で

あると考えるに至つた」と述べ、依然として若干の譲歩は置きつつも、やはりワシントン自らが書き込んだ日付であると断定したのである。

しかしこの日付部分については、数字だけでなく、原稿と新聞のレイアウトにも違いがあり、この点に関して、管見の限り、これまで注目されることはなかった。すなわち原稿では新聞と異なり、括弧の外側に年次(一七九六)が記されているのである(図4)。このような表記法は、たとえば同様のフォーマットでワシントンの右筆が記した年月日の書き方(図6)と比べれば、明らかに異質といわざるをえない。図6のフォーマットでは、「United States」と、すべての日付(年月日)が括弧で連結されているのである(ただしこの図の場合、月日の順はいわゆるアメリカ式であり、しかも日は空白であるが、ここではこれらの差異は捨象する)。常識的に判断するならば、この図6の括弧の表記法の方が、より一

図6 ワシントンの年次教書(1794年)草稿の末尾部分(署名のみ自筆)。(John Rhodehamel, *The Great Experiment: George Washington and the American Republic* (New Haven, 1998), p. 137.)

般的に用いられたと考えられ、実際、新聞における告別演説の括弧のレイアウト(図3)も、また、おそらくはそれに倣ったウィームズの『ワシントン伝』における括弧のレイアウト(図1)も、図6と同様の配置となっている。逆にいえば、新聞における括弧のレイアウトは、ワシントンが原稿に記したレイアウトを無視して、通常の表記法に修正されているということができよう。したがって、ワシントンの原稿がイレギュラーな括弧の表記法をあえて採らざるをえなかったのには、何らかの特別な事情があったと考えるべきであろう。推理してみよう。まず、「United States」の文言と、ワシントンの署名がほぼ同一線上にあることから、この両者ともにあらかじめ——少なくとも日付を記入したことの日より前に——記入されていたことが強く推測される。早朝の慌ただしい中、ワシントンの脳裏には、昨日クレイプールと定めた発行予定日の「九月一九日」が浮かんでいたことだろう。すでに記していた「United States」の下に、定石通り、彼は「九月一九日」と書き加えた——「United States」とほぼ同じ長さで。両者を括弧で結んだ直後(もしくは括弧で結ぼうとした時)、彼は年次も記載すべきであることに気づく。掲載されるのが新聞であるからには、当該の文章を目にする者にとって日付が何年であるかは明々白々とはいえ、発行後に縷々転載されるに違いない最重要文書であつてみれば、年次の記載はむしろ不可欠である。しかしいまさら年次を追加しようにも、すでに記してある自署との

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

間に残されたスペースは狭く、年の後にさらに括弧を追加することは難しい。したがって、むしろ括弧の後に年次を小さく記入した……と想像されるのである。しかもこのレイアウトの処理については、クレイプールが組版時に適宜修正してくれるであろうとの目算もあつたに違いない。むしろ、日付の一部すらすでに記された可能性も排除できない。たとえば図6のように、年次教書の草稿などで日のみを空白としているものも見受けられることから、後で書き加えたのは「一九日」の箇所だけであつたかもしれない。また、日付のうち「九月」のみがすでに書かれていて、「一九日」と年次が後で記入されたとの推測も成り立つ。いずれにしても、この日付のスペースに関しては、あらかじめ書かれてあつた部分と、書かれていなかった部分とのバランス上の問題から、このような表記法を採用せざるをえなかったと考えられうるのであつて、日付がこの一六日に、ワシントンの手によって書き加えられたことを強く示唆する傍証といえるのではないだろうか。さて、この日の朝、リアが新聞社に原稿を持って行き、クレイプールは「ただちに」組版・植字の作業に取りかかつたとして、彼の新聞は翌一七日(土曜日)にも発行されており、しかもそれには補遺二頁、後記一頁も付される盛りだくさんな内容となつてゐることからして、実際に「ただちに」作業をおこないたかどうかは定かでない。ちなみに土曜日の新聞に、告別演説の予告めいたものは、一切掲載されていない。

## 九月一七日土曜日

日曜日は休刊日であることから、ガストンは一七日(土)に實質的な作業が始まったと考えている。<sup>21)</sup>そしてクレイプールのこの日の日付を、告別演説の日付とした可能性がきわめて高い。パルツイツも、クレイプールが実際の刊行日ではなく、組版の日に合わせてとしている。<sup>22)</sup>つまりワシントン自身は、クレイプールの会見で決まった発行予定日の一九日(月)を原稿に記したが、クレイプールはこれをいわば勝手に変えて、組版作業の實質的な開始日(もしくは内校ないし初校の刷り上がった日)を、そこに記したのである。ワシントンの指示通り、新聞発行日を「演説」の日付としてしまうと、時系列的に不自然さが否めないと考えたのであろうか。すなわち、まず「演説」の原稿がすでに書かれていて、それを活字にして新聞紙上に掲載するという流れを想定するならば、「演説」の日付と新聞発行日が同日というのは、矛盾以外の何物でもない。これを矛盾と捉える発想は、新聞人たるクレイプールにとっては自然であつたらうし、活字ケースから原稿に沿って文選し、組版・印刷を行う一連のプロセスを指揮する彼にしてみれば、その程度の「軽微な」変更、ないし調整は日常茶飯事であつたかもしれない。しかも、安息日たる翌日曜日の日付(一八日)を付すという選択はなかつたであらう。つまりクレイプールにとつて、一七日こそが唯一可能な選択肢だつたと考えられる。もちろん、彼(直接的には文選した人物)が単純に間

違つた(日にちを勘違いした)可能性、すなわち意図せずして(もしくは無意識に)一七日に変えてしまつた可能性も否定はできないが、当代一流のプロフェッショナルともいえる彼が、かくも重要な仕事において、そのような間違いを犯すとは考えにくい。日付を変更するに際しては、彼の何らかの意図を読み取るべきであらう。もっとも、彼の証言の中には、日付の変更に関する記載はないため、すべては推測の域を出ないことも確かである。

一方、ワシントンは、そもそもなぜ、新聞発行予定日を原稿に記したのだろうか。これも推測するしかなく、いわば無意識だつたのかもしれないし、一種のメモ書き・備忘録に準ずるものとして予定日を記した可能性もあろう。ただ、積極的な意味をそこに見出すならば、新聞発行日に、当該の紙面を通じて、国民に「演説」するかのときイメージをワシントンが抱いていた証左と言えるかもしれない。すなわちその場合、新聞発行日が「演説」の日付になるのである。このように考えてゆくと、われわれが関心を抱く日付の問題は、ワシントン自身がこの「演説」をどのように捉えていたのかを解明する一助となりうるかもしれない。

しかしその一方で、ワシントンは日付自体にはさして拘泥していなかったともいえる。さらには、クレイプールが日付を変更したこと、校正刷りで気が付かなかつた可能性すらある。もしもワシントンが発行日を強く意識していたのであれば、校正の段階でもう一度、一九日に変更し直したはずであるが、クレイプール



の証言でも、ワシントンは大きな変更をおこなわなかったのである。それゆえ、ワシントンもこの日付の変更を了承したと推測することができる（ただし、もしも気が付かなかったのだとしたら、ワシントンは本来の原稿どおりに、一九日の日付が記されていると思っ込んでいたかもしれない）。クレイプールの証言によれば、ワシントンによる変更は「句読点」以外にはなかったのであって、さらにこの証言から、逆の考え方も、すなわちクレイプールは原稿通りに一九日と活字を組んだが、ワシントンが一七日に訂正したとの考え方も、成り立たないであろう。なんとすれば、クレイプールはこの日付について、【史料4】にある自身の草稿と陳述書との相違を意識しているはずであるから、自身ではなく、もしワシントンが校正段階で変更したのであれば、それを「句読点」の変更の範疇には収めないと考えられるからである。当時、そして大きな操作とは思わずに、クレイプール自身が日付に変更を加えたため、陳述書においては沈黙を守ったのではなからうか。なお、この日、クレイプールがワシントンのもとに初校を持っていったかどうかは定かでない。

#### 九月一八日日曜日

この日、校正刷りをワシントンのもとに、クレイプールが自ら届けた。校正は二度、すなわち初校と再校が出されているが、この日に初校と再校をワシントンに届けたのか、初校は一七日で、

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

一八日は再校のみだったのか、定かでない。また、校正刷りを届けた際に、日付に関してワシントンと何らかの会話が交わされた可能性も想定されるが、むしろ史料には記載がなく、知るすべはない（ただし、ゲラの受け渡しに際しては、ワシントン本人ではなく、秘書のリアが対応した可能性も高い）。この日、校了（もしくは責了）となった。

#### 九月一九日月曜日

ワシントンは早朝、仕事をいくつか済ませた後、新聞が発行される前に、マウントヴァアーンンに向けて旅立った。この日の『アメリカン・デ일리・アドヴァタイザー』紙の見開き二ページ目と三ページ目に掲載された告別演説には、見出しやコメントなどは一切付されていない。<sup>(23)</sup>

#### 九月二〇日火曜日

クレイプールの新聞にワシントンが前日の朝、マウントヴァアーンンに向かったとの短い記事が掲載される（図7）。この日の新聞にも、告別演説についてのコメントなどは一切掲載されていない。

Philadelphia, Sept. 20.  
Yesterday morning the President of the  
United States left this city, on his journey  
to Mount Vernon.

図7 『アメリカン・デ일리・アドヴァタイザー』紙掲載の大統領消息記事。(Claypoole's American Daily Advertiser, No. 5445, Philadelphia, Sep. 20, 1796, p. 3.)

上記の事実を簡潔にまとめるならば次のようになる。①ワシントンはおそらく一六日金曜日の朝に、自筆の原稿(最終草稿)に日付を「九月一九日」と記した。それは単に新聞発行予定日に合わせたというだけでなく、自身がこの「演説」をどのように捉えていたのかを示唆している可能性もある。②クレイプールはおそらく一七日土曜日から本格的に始めた組版作業の際に、日付を「九月一七日」に改めた。この日付は、クレイプールにとって唯一の選択肢といえた。③二度にわたる校正作業を通じてワシントンは、この日付(の変更)を目にしているため、少なくとも形式的にはそれを認めたことになる(たとえ彼が変更気づかなかつたとしても、また、可能性は低いと思われるが——クレイプールが単純に間違っただけだとしても)。したがって、一七日も一九日も、ともに告別演説の日付としての資格を有しているといえるのであって、どちらかの日付に優位性を与えることは困難であろう。

## 第五節 その後

ワシントンの告別演説は衝撃的な内容でもあり、ただちに全米各地の新聞に転載され、外国でも報じられた。たとえばニュージーランドで共和派の代表的な新聞とされるポストンの『インディペンデント・クロニクル』紙でさえ、早くも九月二六日に告

別演説の全文を掲載している。その末尾の日付の表記は、むしろ『アメリカン・デイリー・アドヴァタイザー』紙のレイアウトとほぼ同じである(図8)。この新聞は、告別演説の発表が直前に与えた影響の一例であるが、一七九六年だけをとっても、さまざまな新聞や雑誌に演説が転載されている。表3は、すべてを網羅しているわけではないが、記載されたタイトルごとにそれらを集計したものである。対象とした全五四紙(「誌」も含む)のうち、オリジナルの緒言(“To the People of the United States”)をそのままタイトルとした二紙(10番)以外、すべて新たにタイトルが付されている。多い順に並べるならば、「演説(“Address”)としたのが三七紙(1番～8番、15番)、「辞任(“Resignation”)が六紙(15番～19番。15番は「演説」の語も有している)、「手紙(“Letter”)が四紙(9番)、「遺産(“Legacy”)も四紙(11番～13番)、「挨拶(“Speech”)が二紙(14番)となる。もちろん完全に同一のタイトルの記事の間では、テクストの直接的な転載関係が存在したと推測される。このようにして、タイトルに最も多く含まれる「演説」の語が、ワシントンの告別演説を示す指標として、直後から広く用いられていたこ

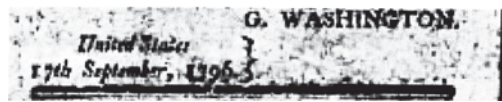


図8 『インディペンデント・クロニクル』紙掲載の「告別演説」の末尾部分。(The Independent Chronicle, Boston, Sep. 26, 1796, p. 2.)

表3 「告別演説」の呼称分布

番号	タイトル	NH	VT	MA	RI	CT	NY	NJ	PA	DE	MD	VA	NC	SC	US	E	S	I	計
1	The President's Address	1		1			1		6		1	3	1		3				17
2	The Address of the President			1			3							1					5
3	Address of (by) George Washington		1		1	1	1				1						1		6
4	The Address of General Washington															2			2
5	President Washington's Address			1															1
6	General Washington's Farewell Address																1		1
7	An Address to the People of the United States	1							1	1									3
8	An Address to the United States of America															1			1
9	A Letter to the People of the United States														3		1		4
10	To the People of the United States				1			1											2
11	The Legacy of the Father of his Country			2															2
12	Columbia's Legacy								1										1
13	America's Legacy						1												1
14	The Speech of George Washington															2			2
15	The Address or Resignation of our Worthy President						1												1
16	President Washington's Resignation			1															1
17	George Washington's Resignation		1																1
18	Resignation of his Excellency George Washington						2												2
19	The Resignation of General Washington															1			1
	計	2	2	6	2	1	9	1	8	1	2	3	1	1	3	9	2	1	54

[凡例] NH ニューハンプシャー、VT ヴァーモント、MA マサチューセッツ、RI ロードアイランド、CT コネティカット、NY ニューヨーク、NJ ニュージャージー、PA ペンシルヴァニア、DE デラウェア、MD メリーランド、VA ヴァージニア、NC ノースカロライナ、SC サウスカロライナ、US 合衆国（出版地不詳）、E イングランド、S スコットランド、I アイルランド

とが確認されよう。ただし、今日一般的に使われる「告別演説 (Farewell Address)」の語を採用したのは、スコットランドの新聞(6番)であり、外国ゆえに、より客観的な見方が可能だったと推測することもできる。ちなみに、このタイトルも含めて、イギリスでは「ワシントン將軍 (General Washington)」の表記が多く、アメリカ独立革命を「革命」ではなく「戦争」と呼称していたイギリス英語の表記法からすれば、納得できる結果といえよう。さらにこの表からは、ペンシルヴァニア州で記事の数が多くなっているのは当然としても、出版の盛んなニューヨーク、マサチューセッツでも、やはり記事が多いことが確認できる。また、これらの諸州に限らずとも、各州である程度表記法がまわっていているという事実から、記事の転載を通じて各州内でメディアが相互に影響を与えあっていたことが想定されるのである。

では、これらのテキストのオリジンともいえるワシントンの最終草稿、つまり告別演説の草稿はどのような運命を辿ったのだろうか。これを守り続けたクレイプールは、一八四九年に九一歳で死去した。三人目の妻よりも、そして一人の子どもたちよりも長生きし、残されたのは傍系の子孫のみであった。彼らの中にクレイプールの「遺志」を継ぐ者はおらず、手稿を含む彼の遺産はオークションにかけられ、一八五〇年、手稿はニューヨーク在住の大立者ジェイムズ・レノックスによって二三〇〇ドルで落札された。合衆国政府も入手に動いたが一足遅かったという。レノッ

クスはただちに手稿テキストの出版を計画し、二ヶ月ほどで上梓にこぎつけた。これこそが先述の稀覯本、*Washington's Farewell Address to the People of the United States of America* である(すでに述べたように、その貴重な一冊がニューヨーク公立図書館の貴重図書室に厳重に保管されており、特別に許可を得て同書を実見した)。一方、オリジナルの手稿はその後、レノックスの私設図書館に所蔵され、一般にも公開されていたが、この私設図書館がニューヨーク公立図書館に組み込まれたことでその所有となり、今日に至っている。かくしてこれら関連史料は、ワシントンが初代大統領として最初の就任演説をおこなったニューヨークの地で、安らかな眠りについているのである。

## 註

- (1) ワシントンに対する大統領職への就任要請に関しては、拙稿「一八世紀アメリカに関するデジタル史料と未刊行手稿史料(1)——ワシントン・懐中時計・差押え令状」(『名古屋大学文学部研究論集』一七三号、二〇一二年)第一章、同「一八世紀アメリカに関するデジタル史料と未刊行手稿史料(2)——ワシントン・モリス・軍票」(『名古屋大学文学部研究論集』一七六号、二〇一三年)第一章を参照。
- (2) ウィームズ『ワシントン伝』については、拙稿「一八世紀アメリカに関するエフェメラ——ワシントン・受領証・手形」(『名古屋大学文学部研究論集』一七九号、二〇一四年)第一章第一節を参照。
- (3) Mason Locke Weems (alias Parson Weems), *The Life of George*

- Washington, with Curious Anecdotes, Equally Honourable to Himself and Exemplary to His Young Countrymen, 11th ed (Philadelphia, 1812).
- (4) *Ibid.*, *The Life of Washington*, 9th ed. (Philadelphia, 1809), ed. Marcus Cunliffe (Cambridge, Mass., 1962, 1994), 159.
- (5) わが国においては「こまごまの系譜、すなわち「一月十九日」の系譜も存在しているが、これは明らかに誤植(の連鎖)である。なお、「一七九日説」では、告別演説が実際に演説されたことと記しているものもあり(表一の番号4、モリソン訳など)一方、「一九九日説」では、演説されたとしているものはない。また、現在まで版を重ねているティンダールの著書なテキスト(番号5・6)は、異なる版で表記が変化することを示す好例といえる。すなわち、まず第二版では、告別演説が演説された文章でないことは明記しつつも、その日付を「一七日」とし、「その二日後」に『アドヴァタイザー』紙に掲載されたことと述べている。著者のこの表現は実のところ、かなりミスリーディングであり、この点に気が付いたのか、著者はすでに第五版では、新聞掲載日については触れず、文章の日付が「一七日である」とのみ明記している。
- (6) Patrick J. Garrity, *A Sacred Union of Citizens: George Washington's Farewell Address and the American Character* (Lanham, Md., 1996), 195. 『ワシントン文書集』のサイトによれば6種類(㉓㉔㉕㉖㉗㉘)のうち(「The Papers of George Washington: Documents, The Farewell Address, Introduction」)。
- (7) この最終草稿に関しては、連邦議会上院の歴史局おとづま、二〇〇〇年に印行、販売されている(印刷は合衆国印刷局)。Washington's Farewell Address to the People of the United States (106th Congress, 2nd Session, Senate Document No. 106-21, Washington, 2000). 活字化された日付は、[http://www.virginia.edu/gwpapers/farewell/fvaintro.html/](http://www.virginia.edu/gwpapers/farewell/fvaintro.html) (8) <http://www.virginia.edu/gwpapers/farewell/fvaintro.html/>
- (9) 本文中で後述するGarrity, *A Sacred Union* など。
- (10) たとえば、専門家によるワシントンの事典でも、告別演説の項目に記載も

ワシントン「告別演説」の日付に関する一考察(和田)

- れた日付は「一九日である」(Frank E. Grizzard, Jr., *George Washington: A Biographical Companion* (Santa Barbara, Cal., 2002), 389)。<sup>44</sup> また、シモン・ブーシャルの有名な「ワシントン伝」を短く一冊にまとめた書物では、編者が作成した附録Bに重要文書が五点収録されており、告別演説もその中に含まれているが、文書自体の日付は「一九日」とされている(John Marshall, *The Life of George Washington* (Special Edition for Schools), ed. Robert Faulkner & Paul Carrese (Indianapolis, 2000), 487)。
- (11) 同書は、昭和四十七年に水川洗氏より名古屋大学文学部に寄贈されたもので、現在、西洋史学研究室が所蔵している。
- (12) 校正刷りをペンシルヴァニア歴史協会やニューヨーク州立図書館が保有しているとする俗説がかつてあったが、いずれも間違いである。またワシントン自らが手を入れた初校ゲラを、彼の指示で秘書がファイルしており、それが一八九一年にマウントヴァアノンに寄贈されたとの話が一九三二年に「確認」されたともいわれるが、これについてもやはり判断としない。
- (13) ワシントンの日記には、一七九六年は六月二日までの記載しかない。次に記載が始まるのは、飛んで一七九七年一月一日である(Donald Jackson & Dorothy Twohig, eds., *The Diaries of George Washington*, Vol. 6 (January 1790 - December 1799) (Charlottesville, Va., 1979), 227-228)。
- (14) Patsis, *op. cit.*, p. 259 所収。
- (15) *Ibid.*, pp. 288-289 所収。
- (16) *Ibid.*, p. 289 所収。
- (17) *Ibid.*, pp. 290-292 所収。
- (18) *Ibid.*, p. 292 所収。
- (19) 当時のフィラデルフィアにおける大統領府と新聞社との地理的位置関係については、たとえば次のウェブサイトなどから推定できる(URは省略)。「Late 18th Century Philadelphia, Block by Block: The President's

- House in Philadelphia." Philadelphia Architects and Buildings: Robert Morris House." "Market Street by Rudolph J. Walther." "Independence National Historical Park: The Robert Morris Mansion." 周知のように、フィラデルフィアが連邦の首都だった時、二代の大統領はロバート・モリスの邸宅を大統領府として使用した。邸宅は当時、『President's House』"Executive Mansion" "Washington Residence" などと呼ばれた。
- (20) Palsits, *op. cit.*, p. 52.
- (21) Gaston, *op. cit.*, p. xxiv.
- (22) Palsits, *op. cit.*, pp. 52-53.
- (23) この告別演説を最初に『Washington's Farewell Address』のタイトルで報じたのは、『クーリア・オブ・ニューハンプシャー』紙だったとされるが、後述する表3には含まれていない。
- (24) 同表はバルツイッツの上掲書に収録されたデータ (Palsits, *op. cit.*, pp. 327-360) を基に、筆者が新たに集計してまとめたものである。

キーワード：ワシントン、告別演説(告別の辞)、ウィームズ

**Abstract**

## An Essay on the Date of Washington's Farewell Address

Mitsuhiro WADA

This paper revisits the textual question concerning the date of Washington's Farewell Address by utilizing several historical documents which are relevant to the subject. Important facts found or conjectured include: (1) By his own hand, President Washington probably wrote down the date, "19<sup>th</sup> September," in his final manuscript in the morning of Friday, 16<sup>th</sup> in order to adjust the date of his manuscript to the prearranged date of publication of the newspaper in which his Farewell Address would appear. This act may suggest his own point of view to his Farewell Address. (2) It is also probable that David C. Claypoole, the publisher of the newspaper, *American Daily Advertiser*, changed the date in the president's manuscript to "17<sup>th</sup> September" when the typesetting of the manuscript started on a full scale on Saturday, 17<sup>th</sup>. Moreover the date, "17<sup>th</sup> September," was the only option Claypoole had when he tried to change the date. (3) By reading the proof sheets twice, President Washington formally authorized the change of the date as a result (even if he did not recognize the change). (4) Based upon the facts and conjectures above, both dates, "17<sup>th</sup> September" and "19<sup>th</sup> September," equally have eligibility to be identified as the date of Washington's Farewell Address.

Keywords: George Washington, Farewell Address, Mason Locke Weems